

歴史災害から見る名古屋〔明治～昭和(戦前)〕

近代都市への歩み～明治から昭和(戦前)時代～

明治～昭和(戦前)時代にかけては、市電や名古屋港などが整備されて近代都市へと発展する一方、濃尾地震や昭和東南海地震による都市型震災の被害に遭いました。

濃尾地震

明治24年10月28日(1891年)に発生した濃尾地震の震源は、岐阜県本巣市根尾付近であったにもかかわらず、名古屋市域にも家屋の崩壊や防波堤の破堤、道路の崩壊など大きな被害を及ぼしました。

損壊した名古屋城

①名古屋城の各所で壁が剥がれ、石組が崩れるなどの損壊がでました。特に、武具類や非常食を収納していた「多聞櫓」と呼ばれる長屋状の建物は壁、屋根等到大被害を受けたため、後に取り壊されてしまいました。



【壁が剥がれた名古屋城】

枇杷島橋の落橋

西区②枇杷島付近の大橋は大きく曲がってしまい、通行が困難となりました。西枇杷島町付近では液状化現象も発生し、「亀裂より水・水煙を噴出し、又井戸より多量の水を一時に噴き上げ、近傍一面水となる」との被害の記録が残っています。



【折れ曲がった枇杷島橋】

近代的建造物の崩壊

当時の最新技術を駆使したレンガ造りの③名古屋郵便電信局(中区栄三丁目)、尾張紡績会社(熱田区旗屋町)や愛知セメント会社(熱田区白鳥町)は無残に崩壊し、大きな被害を出しました。



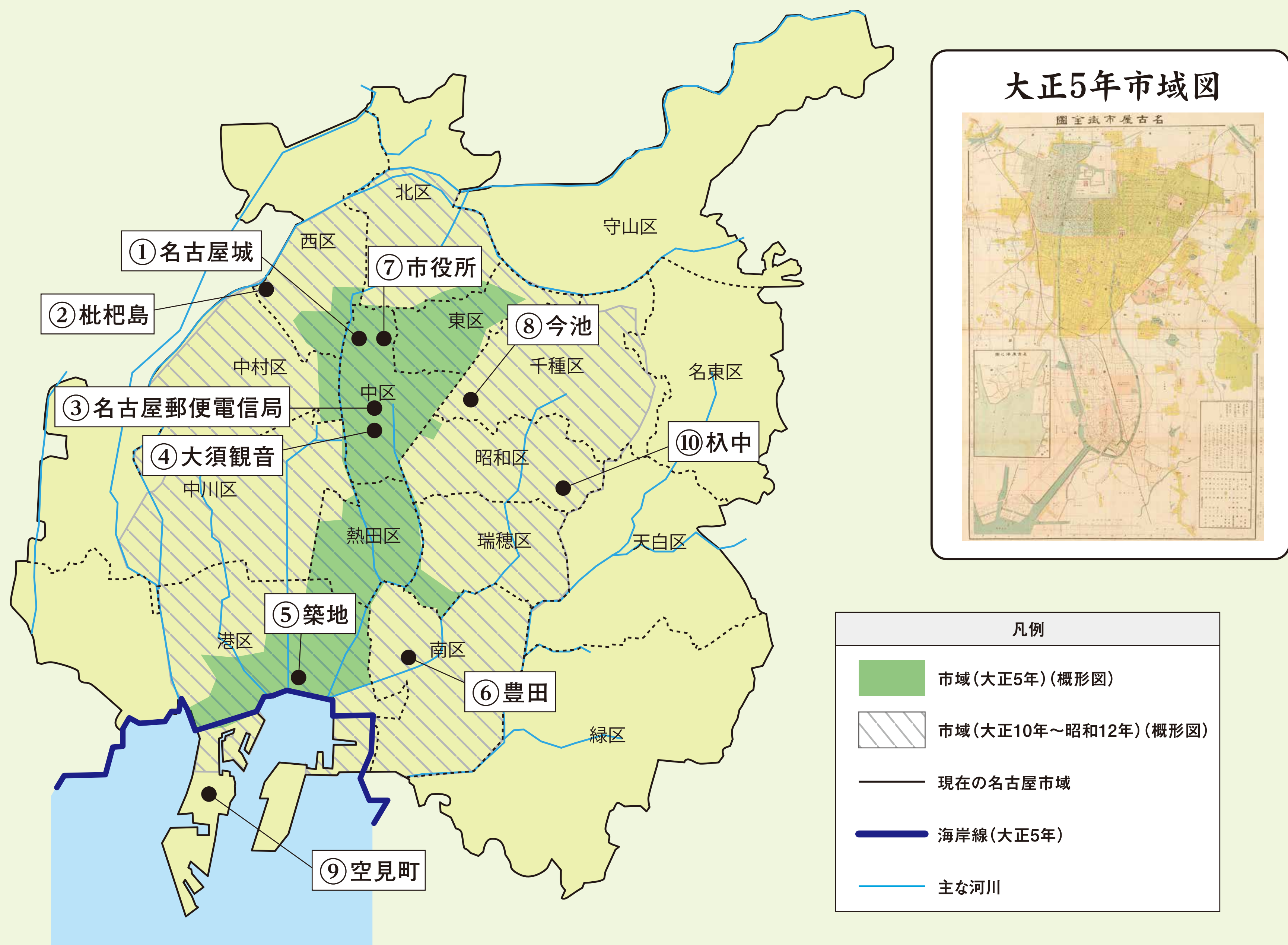
【崩壊した名古屋郵便電信局】

避難所となった大須観音

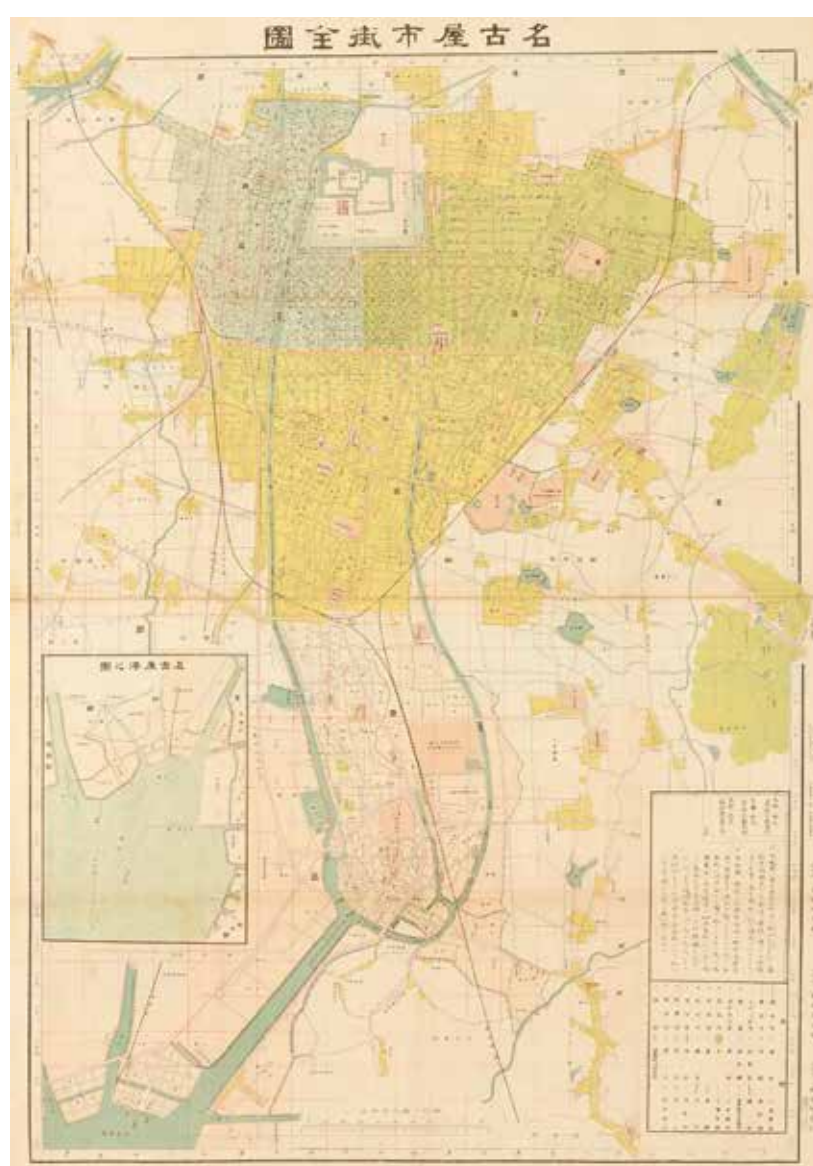
市内で被害を受けなかった家屋はほとんどないといわれており、中区④大須観音の西側に存在した遊郭街(北野新地)も大きな被害が出ました。その際に大須観音の境内が被災者の避難先として使われました。



【被災した遊郭街】



大正5年市域図



凡例

- 市域(大正5年)(概形図)
- 市域(大正10年～昭和12年)(概形図)
- 現在の名古屋市域
- 海岸線(大正5年)
- 主な河川

昭和東南海地震

昭和19年12月7日(1944年)に発生した昭和東南海地震は、市電軌道やガス管・水道管の破損など都市機能に被害が大きく、死者は1,000人を超えました。被災当時は戦時中のため、当時の資料はほとんど残っていないのが現状です。

南部に集中した被害

当時の名古屋市域全体で見るとあまり被害がなかったようですが、市南部に位置する港区⑤築地地区、南区道徳地区など局地的に見ると約半数の世帯が被災するという大きな被害になりました。



【被災した市内の様子】

被害を受けた重工業地帯

市南部に位置した日清紡績道徳工場(南区⑥豊田地区)は全壊し、三菱重工業名古屋航空機製作所大江工場(港区大江地区)では屋根が破壊され、多くの死者を出し、生産能力が著しく低下しました。



【日清紡績道徳工場跡地にある石碑】

行政による復興対策

地震から数日後、燃料として各区役所や⑦市役所保管の新炭と非常用の乾パンを配給しました。また、愛知県貸家組合連合会が市内に空き家を確保し、臨時住宅相談所を設けて住宅の無料斡旋を開始しました。



【被災当時の新聞記事】

この時代の市域について

明治から昭和(戦前)にかけて名古屋市域は大きく広がっていきました。拡大した理由は合併や干拓・埋め立てなど多岐に渡ります。ここでは、なじみの深い地名の成り立ちについて見てみましょう。

ため池だった「今池」

千種区⑧今池は、江戸時代に現在の今池中学校付近に存在した農業用のため池が名前の由来とされています。ため池だった部分は、大正10年(1921年)に耕地整理事業のため埋め立てられました。



【赤丸部分がかつての今池】

名古屋港拡充により誕生「空見町」

名古屋港拡充のため、昭和初期に公有水面の埋め立てが行われ、港区⑨空見町が誕生しました。町名は、新設当時にこの地が市の南端に位置していたことから、空と海が見渡せるといった意味から名付けられました。



【赤丸部分が空見町の埋立予定地】

地名から消えた「杵中」

「杵中」の「杵」の字には「水門」という意味があり、「単人池」とかつて存在した「新池」の「水門」に挟まれていたために「杵中」という地名になったという説があります。現在、地名では「杵中」は存在しませんが、駅や交差点名に残っています。



【赤丸部分がかつて存在した新池】